

AQUA ～その水と  
出遭いの惑星で～

ノナノナ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

水の惑星AQUA。

アイちゃんたちがシングル・ウンディーネとして活躍する時代を背景に、AQUAのもう一つの魅力、ネオ・ヴェネツィアだけでないAQUAはどんな所なのか。そんな素敵を描いてみたいと思います。

はじめは、グランマが隠居していた日本地区。そして――。

さあ、新しい旅に出掛けましょう。b u o n v i a g g i o !

# 目次

Intermezziol	1
Serenata 1	アクア・アルタ
12	
Serenata 2	青の島に降る雨は
23	
Serenata 3	その篝火と集う妖
39	
精は	
Notturvol	蘇杭水鎮新地
49	
Notturvol 2	朧翠望楼、湖の霞
56	
に浮かぶ小亭で	



# I n t e r m e z z o l

I, 火星テラフォーミング、AQUAの成り立ち。

・ Phase 1。

火星をテラフォーミングするに当たって、まず薄い大気を地球に近い組成にすると同時に、極寒な地表を温めるために温暖化ガスであるオゾンと二酸化炭素が注入された。現在AQUAがマンホームより厚いオゾン層を持つのはこのためで、弱い太陽光でも温暖でいられるのである。そして極冠に蓄えられていた水が融け始め、数億年ぶりにまたまった液体としての水が地表に現れた。

・ Phase 2。

ここままで火星に有った水は使い切り、より海を拡げようと短周期彗星や小惑星を集め水資源とした。いまAQUAを公転する二つの月がジャガイモのような歪な姿でなく、地球の月より小さいながら球形をしているのは、重力操作され資源集積として利用された名残である。そのためかつてのフォボス・デイモスよりも大きい。また火星自体も重力改造され地球と同じIGの星となった。また重力操作で火星の核が温められ、マントル対流と火山活動が活発になり火星は生きた星に生まれ変わった。エリシウム島、

へスペリア列島から、ケプラー島、プロメテ諸島を経てネオ・メガラニカ大陸を結ぶ線上にマントル上昇による海嶺帯が、マリネリス峽海沖のクリュセ海谷からアルギレ海盆を結ぶクラリタス大陸の東沿いにはクラリタス海溝としてマントル下降帯が形成されている。火山活動が活発化したオリンポス・タルシス山塊群沖やクラリタス海溝の大陸棚側にはメタンハイドレードの露塔が並んでおり、大量のメタンガスが大気中に放出されている。火星に導入された二酸化炭素は海中に溶けて減少したが、活発化したマグマでメタンが生まれ温暖化ガスとして火星を温め続けている。

やがて重力操作と大気改造、気候制御で海岸には植物が繁殖し始め、北半球に広大な海が出現し本格的な環境改造が始まった

・ phase 3.

人類が居住可能な惑星環境が整いつつあり入植も検討され始める。そこで、グローバルデザインとしてどのような惑星とするかが問題となり、主に開発を行う植民星とするか、地球が失ってしまったものを保全するリコルド（記憶）の星とするかで討議が重ねられた。しかし結論を待つまでもなくマンホームが失ったものは余りにも大きかった。

・ phase 4.

資源の有効利用からは phase 3 が適当だったが、北半球と南半球で陸地面積が偏り過ぎ惑星環境が単調になること、海洋面が温暖を調整する保温材料となり穏やかな惑星

環境が維持できること、なにより大気に複雑な対流が起きることで豊かな気象の個性が生まれることを求めて、惑星の90パーセントまで海洋が占める利便性の高い画一的な星とするよりもマンホームが手放してしまった多様性を求めて、テラフォーミングはPhase4まで進められた。

利便性よりも多様性に重きを置いて、水の惑星と言われる蒼い海と無数の島々が散らばる現在のAQUAが出来上がった。

そして、いまから150年前より、AQUAへの本格的な入植がはじまる。

## II, AQUAの地勢。

AQUA本土と言える一番大きな島がクラリタス大陸で、AQUAのほとんどの人がこの島に住んでいる。AQUAの中心地ネオ・ベネチアもここにあり、南半球アオニア湾のシレナ諸島に面した一角に建設された。またもう一つの中心地である水鎮新地（蘇杭市）は、クラリタス大陸内奥まで入り込んだリネリス峡海が逆T字に切れたルナ地方東部にある。

クラリタス大陸の西側には、大小さまざまな島が散らばる大洋が広がっており、特にクラタリス大陸西岸のシレナ列島、そして、ヘラス海を囲むように点在しているノアチス諸島、サバ島、シルチス島、テイレナ島、ヘスペリア列島が重要である。シレナ列島

は新秋津嶋、ヘラス海を囲む島々は「アクアの真珠の首飾り」と呼ばれている。

AQUAの大半を占める大洋が、かつてのオレンジ・プラネットの記憶(リコルド)にちなんで名付けられた太橙洋である。

北に北極海に当たるとボレアリス海が続いており、南には南極大陸に当たるとネオ・メガラニカ大陸が横たわっている。ボレアリス海、ネオ・メガラニカ大陸は、ともに分厚い極冠氷原に覆われている。

#### ○AQUAの自然

一大特徴は見た通り、マンホーム(地球)以上の蒼い星であること。

表面積の9割を海洋が占め、かつて荒野の星であったオレンジ・プラネットは、アクア・マリンの水の惑星となった。しかし地球の二分の一の大きさでありながら満々と湛える(高低差は地球の三倍もある地形をほとんど覆っている)膨大な水の量から、重力調整でマンホームと同じIGとはいいながら干満の差は大きく、潮汐力で赤道付近が膨らんでいる。夏の初めの大潮と低気圧が重なったときには、マンホーム時代と同様にネオ・ヴェネツィアはアクア・アルタに見舞われ、マリネリス峽海の奥にある蘇杭市では大海嘯と呼ばれる海面遡上が見られる。そしてマリネリス峽海最奥のノクティス迷谷は完全に水没する。またシレナ列島は梅雨と呼ばれる雨期に入る。

気候は極地の寒帯から赤道付近の熱帯性気候まで多様であるが、水面積の多さから熱



帯と亜寒帯のベルトは限られ温帯が多くを占めている。真珠の首飾りで見られる熱帯珊瑚礁にしても気候制御によって実現している。

気候制御の影響から、南半球の比較的低緯度にあるネオ・ヴェネツィアやシレナ列島では冬季にはかなり冷え込み雪が降る。特にシレナ列島は季節風と海の存在で南部では豪雪に見舞われる。またアマゾンシエラの赤道付近で発生する熱帯低気圧で台風も訪れ、ちょうどマンホーム時代の日本列島に似た環境にある。

北回歸線上にあるルナ地方やマリネリス峽海に珊瑚礁は存在しないが亜熱帯性気候を示す。またノクティス迷谷の一部では熱帯森林群が広がっている。

シレーン海に浮かぶメラレア群島やプロメテ諸島の一部はツンドラ地帯の寒帯で、ネオ・メガラニカ大陸は完全に氷雪に覆われている。

植物は気候環境に合わせた植生遷移を基本においてデザインされており、まだ計画の途上にある。動物群もそれに合わせた種が導入され繁殖している。AQUAが生きた星である以上、終着点はないのかもしれない。しかし今現在をもつてもきわめて自然な風景を持つており、マンホームで失われてしまった光景がAQUAでは気象と共に再現されている。

#### ○クラリタス大陸

AQUA最大の大陸。面積はほぼオーストラリア大陸と同程度。島の北西部に脊梁

山脈であるタルシス山脈が横たわり、北からアスクレウス山、バボニス山、アルシア山が連なる。大陸の北にあるアルバ島や西のオリンポス島も含めていずれも1万5千メートル級の活火山で、タルシス火山群と呼ばれる。ちなみにオリンポス山はAQUAの最高峰で標高17500m。

タルシス山脈の南には肥沃なタタリア平原が広がっており、東のマリネリス峡海とともにAQUAの穀倉地帯となっている。

・ネオ・ヴェネツィア市。

タタリア平原の南にあるアオニア湾のラグーナにネオ・ヴェネツィアがある。アオニア湾と、中間の多島海、ルーカス湾を合わせてネオ・アドリア海と呼ばれ、水没するヴェネツィアの移転という性格もあつて旧ヴェネツィア市民を中心にアドリア海出身者が多い。またネオ・アドリア海の西に位置するシレナ列島が日本からの移民で占められていることから日本人もいる。

アオニア湾南部にはオランダやデンマーク、バルト海からの人々の街が作られている。中心地はサンクトペテルブルクを移転したエカテリンブルグ市である。

・マリネリス峡海、蘇抗市水鎮新地。

クラリタス大陸の特徴ある地形であるマリネリス峡海は、タルシス山脈の麓ノクティス迷谷から始まり、エイウス海路から中央部のメラス湾とコプラテス海路を経て大陸の

東端にあるエオス湾まで、東西3000km南北200km水深7kmに及ぶ大地溝帯である。タルシス山脈と南に広がるソリス高地から運ばれた沃土によって、周辺には広大な耕地が開拓されている。その中心地が、メラス湾のカンドル・オフィル入江にあるルナ地方の蘇江市水鎮新地である。

蘇江市はヴェネツィアの水没でネオ・ヴェネツィアが建設された経緯と同じように、水没の危機に瀕した中国の蘇州・上海を中心に江蘇、浙江地方の古鎮を移築再現した都市である。

当然中国の長江下流域出身者で占められている。しかしルナ地方北西部やエオス湾地域ではベンガル湾やインドシナ半島出身者が多数で、マリネリス峡海奥地のノクティス迷谷はアマゾン河流域者が多い。

#### ・ソリス高地。

クラリタス大陸の中央に位置するソリス高地は標高1500〜2000mのなだらかな丘陵が広がる高原で一大酪農地帯である。ウエールズやアイルランド、ノルマンディー地域からの移民が多くケルトの文化が継承されており、元々アイルランドの民話であるケット・シーがネオ・ヴェネツィアに伝えられているのもこれによる。

#### ○シレナ列島

クラリタス大陸の西に位置し、AQUAの南半分を占める多島海地域の東端に当た

る。旧日本人が多く住み、青秋津嶋と自ら呼んでいる。(正式名称はシレナ列島だが青秋津嶋の方が通じる)

シレナ列島とクラリタス大陸の間にある多島海と呼ばれる海峡を挟んで、北側をルークス湾、南側をアオニア湾がありネオ・アドリア海と呼んでいる。アオニア湾の南には、南氷洋に当たるシレーン海がある。ちなみにシレナ列島とヘスペリア列島の間をアマゾニス海、その北側にある、エリシウム島、アルバ島、オリンポス島に囲まれた海域をアルカディア海と呼ぶ。アルカディア海はそのまま太橙洋とボレアリス海に繋がっている。

シレナ列島には日本からの入植者が多いが、日本の場合はヴェネツィアや江蘇地方その他の、海面上昇によって土地を失って移住して来たケースと異なり、失われてしまった四季のために移住した人々である。いまマンホームと呼んでいる地球は、きわめて合理的に管理された環境となっており、四季をはじめ自然というものを無くしてしまった。その中心が高い科学技術力を持った日本だったのだが、失って自分たちがいかに自然を必要としていたか、自然に生かされていたがに気付いて、自然を取り戻す機運が高まった。しかし自然な海岸や山河、そもそも土というものを無くしてしまった地球では自然を回復させることは困難で、テラフォーミングに新天地を求めた。こんにちAQUAのテラフォーミングにおける環境デザインは日本入植者によるところが大きい。四

季の調整を始めAQUAの自然環境は完全に人工的なものだが、木々の植生は四季の変化と緯度の違いに合わせて「将来的に本来はこのようになる」と、植生遷移をもとに数百年のスパンで計画されている。また海洋生物や動植物種の搬入でも、有用性だけでなく海流や惑星環境の一万年サイクルを考えて導入された。AQUAが、マンホームよりも人工的に作られた惑星であることを忘れるくらい自然に見えるのは、この基本コンセプトによる。

・青秋津嶋

日本人が多く住むシレナ列島に、科学技術が集積したハイテクな都市を見る事は難しい。せいぜい21世紀初頭の地方都市クラスがあるだけである。サテライト空港がある中心地の海明町や海森町がそれである。ほとんどが散在する村落で、きらびやかなネオ・ヴェネツィアやエカテリンブルグ、歴史の重層を感じさせる蘇杭市と比べると、はっきり言って田舎である。しかしこの惑星の成り立ちを考えると、かつて最先端で生活していた人々が、なぜこの島であえて田舎暮らしをしていることが解る。

この島を訪れると、はつきりした四季の移り変わりとそれに合わせて暮らす、高度成長や技術集約に依らない本来の日本の姿を見ることが出来る。

星自体がリゾート地であるAQUAにもかかわらず、観光地でないここは、他のどこよりもゆつたりとした時間が流れている。実際、クラリタス大陸や他地域で活躍して来

た日本系の人々やマンホームから、第一線を退いたあとここに移住してくる人も多い。そのためか他の地域に比べて高齢者の比率が高い。

### ○真珠の首飾り

AQUAには火星と呼ばれていた頃からの三つの巨大なクレータがある。イシデイス、ヘラス、アルギレがそれで、現在は海盆となつて海中に沈んでいる。一番大きなヘラス海盆は、その外輪山が島嶼となつて周囲を取り巻いており「AQUAの真珠の首飾り」と呼ばれている。ノアチス諸島、サバ島、シルチス島、ティレナ島、ヘスペリア列島、ケプラー島、プロメテ諸島、メレア群島などである。シルチス、ティレナ両島の北にイシデイス海盆があり、アルギレ海盆はクラリタス大陸の南東沖にある。

真珠の首飾りのうち三つの大きな島であるサバ島、シルチス島、ティレナ島と、ヘスペリア列島は赤道直下であり、珊瑚礁が存在する。本来なら寒冷であるはずのAQUAに珊瑚礁は生育しないのだが、気候制御により実現している。ためにシレナ列島は定期的に台風に見舞われるのだが、それこそ青秋津嶋だと日本系の住民は気にしていない。

サバ島、シルチス島、ティレナ島にはインドネシアなどメラネシア島嶼群からの出身者が多く、ヘスペリア列島、ノアチス諸島にはポリネシア、ミクロネシア、モルジブなど、海面上昇に没した島々の人々に移り住んでいる。かつてのマンホーム時代と同じく

漁業と観光が中心で、自分たちの文化を継承し海洋リゾート地区となっている。

## Serenatal アクア・アルタ

ボン。

アテンションのポップ音が鳴り、シートベルト着用ランプが灯るとともにキャビン・アテンダントのアナウンスが流れる。

「当機は惑星AQUAの周回軌道に入りました。間もなくマルコ・ポーロ国際宇宙港に到着します。砂の惑星オレンジ・プラネットと呼ばれた火星がテラ・フォーミングされて一五〇年。今では地表の九割が海洋で覆われ、水の惑星AQUAと呼ばれています。」

機内の光景が消えて、漆黒の宇宙に浮かぶ蒼い惑星が足元に広がる。

アクアマリンの青と散りばめられた白い雲。そして無数の島々が海洋に浮かんでいる。ゆっくりと回転しながら、やがて大きな大陸が湾曲した地平線から現れて来る。クラタリス大陸と呼ばれるAQUA最大の大陸。その大陸に侵入コースを取り、宇宙船は下降を始める。

惑星がどんどん大きくなり、長細い列島とクラタリス大陸との間に広がる海洋が眼下に迫って来る。大気圏に入って、薄い雲の層を幾つか通り過ぎると、日の光にキラキラ



と煌めくネオ・アドリア海が拡がっている。

小島の海域を過ぎて、ラグーナが近づき、逆S字状の運河に橙色の屋根がひしめいた島が見えて来る。

「ネオ・ヴェネツィアの天候は晴れ。しかしネオ・ヴェネツィアは、現在アクア・アルタでゴンドラの営業は致しておりません。ホテルでのゆつたりとした時間や、サンマルコ広場での美術観光をお楽しみください。ネオ・ヴェネツィアは皆様に忘れられない、素晴らしい出会いをご提供するでしょう。本日は、太陽系航宙社、東京Ⅱネオ・ヴェネツィア便をご利用頂き誠にありがとうございます。皆様の旅行が素晴らしいものとなりますようお願い申し上げます。」

「アクア・アルタ？」

男の子は座席に置かれた小冊子に目をやった。

「ネオ・ヴェネツィア特有の高潮現象。街じゅうが水に浸かり市民生活に支障が出る。いまどき気候で支障が出るって何。天候操作はされてるんだろ？」

全大型スクリーンの映像が消え、座席の窓にカモメの群れが見える。宇宙船はカモメたちと並走しながらゆつくりと降りていく。

「——なお、水鎮新地、青秋津嶋にお越しのお客様は、マルコ・ポーロ国際宇宙港での連絡案内をご参照ください。アクア・アルタで便に多少の変更が出ております。水鎮新地

にお越しのお客様は第2ロビーへ、ネオ・エカテリンブルグにお越しのお客様は第3ロビーへ、春秋津嶋にお越しのお客様は第5ロビーへ、真珠の首飾り方面へのお客様は――

マルコ・ポーロ国際宇宙港に到着し、ひとりエントランスで連絡便を案内する掲示板を見る男の子。10才前後だろうか、Tシャツと半ズボンにリュックを背負い、大人が近くにいる様子は見られない。

「げ、航空便はここから乗れるけど、連絡艇はいちど宇宙港を出なきゃならないのよ。」

なんて面倒なという顔で、国際宇宙港を出る。

かつて総督宮殿だった国際宇宙港を出ると、本当に街が浸っていた。

建物前の広場も水。歩道と運河の境いも判らない。広場からずーっと海が広がっている。岸と思しき所に杭が何本か突き出っていて、そこから海なんだろうと判る。

でも――

「どーやっていくんだよー」

水深はそれほどある様子はないが、長靴も無く突然の洪水に途方に暮れる男の子。

水は都合よく引く様子も無く、意を決して履いていたシューズを脱ぐ。シューズはリュックに結び付けて。

丸いドームが特徴的なサンマルコ寺院と大鐘楼を正面に、アーチが連続する石造りのパラッツォ・ドウカーレ（総督宮殿）や新行政館に囲まれた、広い空間。開けた海側には二本の石柱が立っている。

水面に広場を囲むバシリカ（列柱廊）が、そして青空と白い雲が、風にさざなみながら映り込んでいる。まるで鏡だ。

じゃぶじゃぶじゃぶ。

水の中を素足で歩く。

ひんやりした石畳みの感触。水はそれ程冷たくない。小さかったときに入ったプールで水遊びした時を思い出す。でもその時よりもずっと巨大。

じゃぶじゃぶじゃぶ。

歩道の真ん中より建物寄りを歩く。道と運河の境目がなく、何となく不安というか落ち着かない。

長靴をはいた人が、とくに何事も無く歩いている。自分と同じ年恰好の子供たちが、水しぶきを蹴立てながら走って行く。運河には荷物を載せた黒塗りのゴンドラが行き交っている。こんな大水だというのに普段と変わらない感じらしい。

けれど、観光用の色鮮やかなゴンドラやトラゲットと呼ばれる渡し船は、杭に結び付けられていて動いていない。乗り場には「休業」の看板が掛かっている。ちよつと運河

の向こう側にも思っても橋伝いに行くしかなく、いつもよりずっと遠回りしなくてはならない。でも街の人々は少しも不便そうにしていらない。

水に浸かっている所は素足で、乾いている所はシューズを履いて、その繰り返し。

青秋津嶋への定期航路がある港へは、サンマルコ広場から少し下ってサン・ザツカリアからヴァポレット（水上バス）が出ているのだが、そんなことは知らない男の子は、迷路のようなサンマルコ地区を、カツレと呼ばれる小路をさまよい網の目のような運河に掛かる（半ば水没している）小橋を幾つも登る。

地図を頼りに行くが、径の両側は軒の揃った建物がひしめき合って日差しも通らず、全く見通しがきかない。しかも曲がりくねっていて枝分かれも多く、自分がどこにいるのか判らなくなる。

大運河をまたぐリアルト橋を渡って、これまた迷路なサン・ポーロ地区を突っ切ってサンタ・クローチェ地区に向かう。

期せずしてネオ・ヴェネツィアの迷宮巡りをしたわけだ。

谷底かクレバスのような小路から、突然視界が開けて広場に出たりする。

そんなところには大概小さな井戸があり、井戸を中心にカンポと呼ばれる石畳の小空間が広がる。え、こんなところに出るんだという意外感。

運河に面したカンポ（広場）には水が入り込んでいて、立ち木や周りの建物が逆さに

映っている。広場はほかの小路にもつながっているらしく、建物の影から急に人が現れたりする。まるで舞台の袖から登場して来て、違う建物の間に消える。

閑静で行き交う人は少ない。繁華街であるリアルト橋でも、ツーリストの姿は少なかった。シーズン前もあるが洪水の影響が大きいのだろう。歩いているのは大抵地元の人のような。慣れた足取りで迷路のなかを歩いている。

時々、一人リユックを背負った男の子に、「チャオ」と声を掛けて来る。男の子はどきまきしながら「チャオ・・」と返す。ただ、それだけ。

たつぷり遠回りして、やつとの思いでサンタ・クローチエの乗船場に到着する。こんなにも歩いたのはいつ以来だろう。マンホームでの移動は自動運転のモービルだ。学校の授業も自宅で済ませられる。買い物もネット宅配。リアルト地区にあったような店のショーウィンドーというものは映像でしか見たことが無い。歩いたのは、学校での郊外遠足以来か。

青秋津嶋行きの栈橋に向かう。

連絡船はもう栈橋に停泊していた。

船は半重力推進のコクーン（繭型）をしておらず、波を切る吃水タイプのもの。旧式というより博物館でしかお目に掛かれないような年代物だった。

パーサーが乗船手続きをしている。

「自動改札じゃないんだ」

パーサーに切符を手渡し、パチンとハサミを入れてもらう。これも初めての経験。船のデッキは板張り。人が乗り込むたびに少し揺れる。

手で開けるキャビンへの出入り口。キャビンも板張りで、硬そうな長椅子が並んでいる。床下からはエンジンの振動音。街の水バスもこの手のものばかりらしい。

街のコンセプトが、かつてマンホームにあったヴェネツィアの再現といっても、不便じゃないのだろうか。時間も当然かかるし乗り心地だって・・・それに航空便もあるのになんでわざわざ船なんだ、と思う。

祖父が送ってくれたチケツトは、東京⇨ネオ・ヴェネツィアの宇宙便と春秋津嶋への船便だった。

エンジンが唸りを上げて棧橋を離れる。人が乗り移るだけで揺れるような船なのでタグボートの牽引は無い。自走でバツクし距離を取ってから前進を始める。そのたびに船体はたゆたゆと大きく揺れる。

窓辺からネオ・ヴェネツィアの街並みが見える。

ジュデツカ運河を通り、さつき降り立ったサンマルコ広場と大鐘楼が左手に見える。サン・ジオルジョ島を過ぎてラグーナに入ると、徐々に街並みは離れて行く。

波静かなラグーナを囲む半島を過ぎれば外海だ。ネオ・アドリア海に出ると潮の流れ

があり船も揺れ出す。しかしアルタ・アックアといっても天気が悪いわけではなく、海は穏やかだ。酔うほどの揺れは無い。

ネオ・ヴェネツィアと代わって窓辺にはカモメの姿。幾つもの小島が浮かぶあいだを船は進んでいく。

ネオ・アドリア海は、北のルーカス湾と中央の多島海、南のアオニア湾からなる、クラタリス大陸とシレナ列島の間にある広い海峡だ。狭義でネオ・アドリアという時は多島海を指す。シレナ列島の別名が青秋津嶋、この連絡船の目的地だ。

乗客は、日本系の人々が多い。ネオ・ヴェネツィア出身の人も見かける。

キャビンにヴェネト方言と日本語が入り混じっている。ネオ・ヴェネツィアと青秋津嶋は隣どおしで、AGUA開拓当初から繋がりが深い。日本語とイタリア語では単語も文法もまるで違うが言語中枢翻訳で言葉に不自由はしないし、いまではお互いの言葉や文化が微妙に影響し合い、母国の言葉で会話し合っても意思疎通ができる間柄だ。

くうと、お腹が鳴る。

そういうえば、朝食を機内で食べたきり何も口にしていない。

「しまった、トランジット（乗り換え）で何か買って来るんだった」

始めはそのつもりだった。しかしネオ・ヴェネツィアの街をさまよっている間に忘れてしまっていた。お腹が減って来てその事を思い出したが、あとの祭り。軽食の船内販

売も無く、まだ目的地までは相当ある。到着するのは夕方だ。

仕方なく空腹を我慢して座っていると、隣りの中年男性が笑顔で話しかけて来た。ワイシャツにハンチング帽をかぶっている、小太りな恰幅の良い日本人。

「坊主、ひとりで旅行かい」

コクリと頷く男の子。

「そりや偉いな。でもなんだって青秋津嶋なんかに？ 君のような子供が行ってもネオ・ヴェネツィアと違って見るところは何もないぞ」

「観光じゃなく、おじいちゃんと呼ばれて。マンホーム（地球）から」  
「マンホームから、一人で？ 随分と思いつたおじいちゃんだな！」

中年男性は心底驚く。何しろ七八〇〇万キロの旅だ。AQUA（火星）は楕円軌道を描くので平均値だが、マンホームとの最接近でも五四〇〇万、最も離れているときは一億キロ近くに及ぶ。

「でもおじいちゃんはマンホームとAQUAは一本道だから、十歳のお前でも大丈夫だつて。実際なにも無かつたし」

「そりやまあ、そうだが。よく（こ）両親が許可したな」

「こんにちの亜高速でも、三日はかかる船旅だ。」

「お父さんはビーナス計画で金星に出張中。お母さんはツイオルコフスキー宇宙局に



転勤。それでおじいちゃんが僕を呼び寄せたんだって」

ビーナス計画とはAQUAに続き金星をテラフォーミングする事業。ツイオルコフスキー宇宙局は、マンホームの月の裏側ツイオルコフスキー・クレーターにある宇宙開発府のことである。ここで太陽系開発が進められている。

「坊主んところはCOSMO（宇宙）一家なんだね」

ここでまたお腹が鳴り、男の子は赤い顔になる。

破顔する男。

「がははははは、お腹がすいてるのか。え、食べ物を持ってこなかった？　まだ二時間はかかるぞ。」

そう言つて、まあ食べなさいとおにぎりを取り出す。

遠慮する男の子に子供は気を遣うもんじやないと言つて、おにぎりを手に取らせる。

「春秋津嶋の米と焼海苔だ。宇宙一の味だぞ！　おじさんからのお願いだから、是非食べてみてくれ」

しつとりと黒い海苔に、つやつやした米粒。

勧められるまま頬張る。

「——美味しい。」

何の変哲もないおにぎりだが、今まで食べたことのない味だった。男の子は素直に感

動する。

マンホームにもおにぎりはある。でも違う。冷えているのに瑞々しい。そして甘い。驚いている男の子を見て、満足そうな顔の中年男。そうだろうそうだろうと頷いている。そして水筒のお茶も勧める。これも宇宙一だと言い添えて。

単調なエンジン音と船の揺れに、満腹感も手伝って、男の子はいつの間にかうたた寝していた。

いつしか外も暗くなってきている。まだ日暮れには早い時間だ。

やがてほつりほつりと、雨が降り出した。

男の子が目を覚ました時は、窓の外は、篠突く雨。

遠くの島影も雨で煙っている。

ネオ・ヴェネツィアを出た時はあんなに晴れていたのに。

「おう坊主、目が覚めたかい。もうすぐ春秋津嶋だ。え？ 雨がどうした？ ああ今は梅雨だからな。アクア・アルタの時期は、春秋津嶋には雨が降るんだ。かつてのマンホームの日本のようにな」

遠くに、黒く陸地が見えてくる。

水平線に浮かぶ春秋津嶋は、青でも緑でもなく、利休鼠の雨に沈んでいた。

## S e r e n a t a 2 青の島に降る雨は

「止まないね」

「ずっと降り続けてます」

「話には聞いてたけど、ほんと雨だね」

「ぶ〜ぶ〜い〜」

縁側で空を見上げる。

アイ、アーニヤ、あずさのテルツエツト（三人組）と、アリア社長。

「せっかくの休みなのに、どこにも行けないねー」

「に〜う〜」

「シベリア送りになったようなもんです」

「だから、シベリアあってどこなのよ」

「知りません。」

「私たちのミラクルに、ネオ・ヴェネツィアだけじゃなくAQUAも元気を貰っちゃったのかな」

「なにその微妙に恥ずかしいセリフ。ジイシキカジョウ禁止ー」

アクア・アルタでミラクルなパーティーを計画した三人組。先輩たちも大先輩のアリスアさん晃さんも喜んでくれた。そして伝説のグランマも。

けれどもミラクルが少し効きすぎたようで、翌日になっても水は引かず、何でも数日間続краしい。お店もお休みで、先輩たちから「どこか遊びに行つて来たら」と休暇が貰え、三人は憧れのグランマの故郷を訪ねることにした。以前からグランマの素敵を育てた土地はどんな所なのだろうと興味があつたのだ。

でもグランマの故郷、春秋津嶋のいまは梅雨。

「AQUAって、ほんと水の惑屋よね。ネオ・ヴェネツィアも水浸し、春秋津嶋も雨浸し。」

ころんと縁側に寝転ぶあずさに、アーニヤが突つ込みを入れる。

「雨浸しなんて言葉はありませんよ。それに春秋津嶋はいつも雨が降っている訳ではありません。アクア・アルタは大潮と季節風で起きますが、ちょうどその時期、春秋津嶋は季節風による気圧配置と前線で梅雨と呼ばれる雨期になるんです。アリス先輩が教えてくれました」

「アリスさんって、ほんといろんなこと知ってるんだね。操舵も凄いいし街の知識も豊富だし、やっぱ天才」

「観光案内ならうちの藍華先輩の方が上よ。アリス先輩に観光案内を鍛えたのは藍華

先輩だもの」

普段は先輩の方が自分に惚れ込んで弟子にしたと言っているあずさだが、自分の先輩を見比べられると反応してしまう。

「嬢ちゃん達、せっかく来たのどこにも行けないね。果物食べるかい」

お世話になってている民宿のおじさんが、籠に盛られた果物を差し入れてくれる。

「わあ、ありがとうございます」

「ぶいにゅ〜！」

果物の山にさっそく飛び起きるアリア社長。

「これって、枇杷？ですよね。はじめて見ました」

「この小さな桃みたいなのは杏子ですね。そのままよりもジャムやシロップ漬けにするのが一般的では」

最近プリマに昇格した杏先輩の名前と同じ果実を見るアーニヤ。

「まあそうなんだが、酸っぱい感じが、じめじめした梅雨時にはいい刺激なんだよ」  
橙色に熟した実をかじる。桃よりも固く柿よりも柔らかい食感。——そして。

「「すっぱーい」」

「うんにゃーい」

思わず口をすぼめる三人と一匹。そんな様子をおじいさんは笑って見ている。

酸っぱいけれど嫌な酸味ではない。レモンよりも丸っこく甘みがある。たしかにじめじめした雨気を払うにはもってこいだ。

「口直しに枇杷を食べなさい」

おじさんは手で表の薄皮を？いてあげて、アリア社長に渡す。

「あんにゃ〜い」

目を丸くして歓声を上げるアリア社長。もう次をねだっている。

おうおうと次を？く。その様子に見よう見まねで？いてみて、枇杷を食べてみる三人。

「これは——」

「甘いです。」

「甘いけど、優しい味。オレンジ色のAQUAの風と夕日を、実の中いっぱい集めたみたい」

「アイ、恥ずかしいセリフ禁止」

「え——」

「止まないね」

「ずっと降りっぱなしです」

「雨だね」

「……………」

ざーざーと屋根を叩く雨の音。

果物でお腹いっぱいになったアリア社長はお昼寝タイム中。

庭では紫陽花が青く雨に濡れながら咲き誇っている。生け垣にクレチマスが可憐な花をつけ、どこからかクチナシの甘い香りが運ばれて来る。

軒から落ちる雨垂れのリズム。

「でも、とつてもものんびりできますねー。」

「アンタン処（ARRIAカンパニー）は、いつものんびりしてるじゃない」

「日頃の喧騒から自由になれます」

アイはグランマも自分と同じくらいの頃は、こうして梅雨のときを過ごしていたんだろうなと思う。ゆったりした時間が流れる土地で育って、やりたいことを見つけて、ネオ・ヴェネツィアで大妖精と呼ばれるプリマ・ウンディーネにまで登りつめた。アリシアさんはネオ・ヴェネツィア生まれのネオ・ヴェネツィア育ちだが、きつと一緒だろう。そして師匠である灯里さんは自分と同じマンホーム生まれで、やりたいことを見つけてネオ・ヴェネツィアに来て、AQUAからいっぱい素敵を貰った。

こののんびりした時間は、まさにAQUAがくれる贈り物。

まったりしながら、色々な想いをとりとめも無く思っていると、玄関から子供の声が

した。

『こんにちはー』

おじさんが表口に出ていく音。

『おう、遅かったな——』

どうやらおじさんとは知り合いの様子。

『遅かったなじゃないよ。アクア・アルタで大変だったんだから』

『アクア・アルタとはいい経験をしたな。狙って出会えるもんじゃないぞ』

お互い会話しながら三人の居るほうに上がって来る。

「あ。」

タオルで濡れた頭をゴシゴシしながら、おじさんと一緒に入って来たのは、リュックを背負った十歳前後の男の子。

「お客さん、居るんだ」

「こんにちはわー。お世話になってます」

男の子に挨拶するアイたち。

ちよつと驚きながら男の子はお辞儀をする。

「いまはシーズンオフって聞いたけど」

「アクア・アルタで仕事がお休みになったウンディーネさん達だ。ゴンドラ、動いてな



かっただろ。まあ年中シーズンオフみたいなもんだがねウチは」

濡れたままでは風邪をひくからと風呂に案内する。聞けば、男の子はおじさんの孫で、ご両親の仕事の都合でマンホームからAQUAに一人でやってきたらしい。

「二人で?!」

と驚く三人。

特にアイはそうだった。自分が初めてAQUAに来たのが男の子と同じ十歳の時、それも両親にせがんで連れて来てもらってだ。そこでいまの師匠の、まだシングルだった灯里と出会う。

「そうびつくりするほどのことじゃないさ。AQUAとマンホームは乗り換えなし。僕らの時は軌道エレベータと月のツイオルコフスキー・ターミナルで乗り換えて十日はかかったからな」

「十分驚きです」

「お客さんより先に風呂を使ってしまったてすまなかつたが、お嬢さんたちもゆつくり浸かってくれ。——ここのお風呂は自慢の温泉なんでね」

そう言うと、おじさんは夕餉の支度をするよと告げて奥に引っ込む。

日が落ちる時分には雨もやんでいた。

風呂から浴衣に着替えて戻って来ると、料理のいい匂いがしてくる。

「これが噂に聞いた温泉なんですね」

「あつたまつたわー」

「ばいじゃー」

「身も心も染みわたる感触です」

「雨上がりの風がまた良かったねー」

「アイはマンホームで温泉の経験はあるんじゃない?」

「マンホームの温泉に露天風呂なんてないよ」

初めて入った露天風呂の感想に盛り上がる。

さっきの男の子が、お風呂上りにどうぞと麦茶を運んできてくれた。

「うあ、早速お爺さんの手伝い? すごいわね」

誉められて少し照れる男の子。

「お爺さんから聞いたんだけど、一人でマンホームから来たんだって」

コクリと頷いて、自分も麦茶を飲んでいる。

「AQUAは初めて?」

「うん。」

「名前きいていい? 私はあずさ、あずさ・B・マクラーレン」

「野分望海——」

「望海くんかあ。でこつちの巻き毛の子がアーニヤ・ドストエフスカヤ」  
「どもです」

「それと、愛野アイとアリア社長。」

あずさの仕切りで紹介がすすむ。この辺は師匠とそつくりだ。

「よろしくね望海くん」

「ぶいにゆー」

「社長!？」

えらく太った丸まっちいアクア猫に目を移す。——どう見ても猫だ。

「やっぱその反応するわね。ネオ・ヴェネツィアにある水先案内店は店の守り神に青い目の猫を社長にする習慣があるの。でこのもちもちぼんぼんがアリア・カンパニーの社長つてわけ。言葉は喋れないけど、結構頭がいいのよ」

あずさに言われて胸（お腹?）を張るアリア社長。

「どお、AQUAの感想は」

アイが望海に尋ねる。自分たちの大好きな惑星への第一印象に、ワクワクする三人娘たち。

「どおって・・・不便。」

「不便?」

意外な低評価に少し困惑。

「ネオ・ヴェネツィアは洪水で歩けないし、乗り物もないし、ここまでだってビーグルじゃなくて船なんかも。しかも博物館で見たようなやつ。時間もかかるし、面倒だし」

あ、ネオ・ヴェネツィアはアクア・アルタだったと気付く。

「水浸しの運河で荷物を載せた手漕ぎの舟が行き交ってたけど、あれはアクア・アルタだったからなの？」

「ああ、あれは個人所有の黒いゴンドラです。荷物の運搬や配達なんかは普段から使ってるわ。船外機付きのものもあるけど街の運送や移動は大概それですね」

アーニヤが説明する。

「それって、不便——」

それを聞いて、アイが苦笑する。なんだかとても既視感のあるやりとりだからだ。

「どうしたのお姉さん。僕なんか変なこと言った？」

「いやいや全然おかしくない。おかしいのはアイの方、アイが初めてAQUAに来たときも同じ反応だったそうよ。アイもマンホーム出身なの。それでねー、藍華さんに聞いたところでは、ゴンドラただ乗り——」

「あずさちゃん!!」

アイが慌ててあずさの口をふさいだ。

やがてみんなの元に、夕餉が運ばれてきた。

「さあさあ、お待たせ。たんと食べてくださいな。望海もね」

「ありがとう、おばあちゃん」

膳にたくさんの料理が並ぶ。ネオ・ヴェネツィアとは違う、見たことのない料理ばかり。少しづつ器に盛られていて、なんだかおままごとの世界のよう。自分がお人形さんになったような気分だ。でも、とても上品。

彩りよく調理された小鉢たちを従えて、中央に置かれたものは、特に調理した様子が見られない、焼いただけの川魚。

「焼き魚？」

けれどいい香りがしてくる。

先程からしていた食欲をそそる匂いの正体はこれだった。

「鮎というんだ。ここ春秋津嶋の名物さ。AQUAにもここにしか居ない、いやマンホームでも絶滅してしまって食べることの出来ない代物さ。わざわざこれを食べるためだけにマンホームから訪ねて来るほどだよ」

「へえ。でもすっごくいい匂いです」

箸をつけてみると、ほろりと身がほぐれ、湯気と一緒に鮮烈な芳香が立ち昇る。

口に含むと、魚とは思えない繊細で高貴で、若葉のような香りが口いっぱい広がって鼻に抜ける。まるで酔ってしまいそうな味。そして骨まで一緒に食べてしまえるほど柔らかい。

「焼き方にコツがあるんだよ。こいつは炭でなくちやこうは焼けない。どうしても水っぽくなるかパサパサになるかだ。そして火に近すぎても遠すぎても駄目。味付けは塩のみだが、塗り塩にも気を使うねえ」

「ただの焼き魚じゃなくて、すっごく手の込んだ料理なんです」  
ソースもスパイスも使わずに、塩だけで引き出された味に一同感動する。

「素材がいいから出来ることだよ。AQUAがくれる恵みの味さ」

「そうですね、AQUAの夏がこのお魚さんを通して、私たちの体に染み渡っていくんですよ。まるで木々の緑や透明な水のせせらぎに抱かれているよう」  
うっとりするアイ。

「もー、とつても恥ずかしいセリフ禁止!」

「皆さんに気に入って貰えておじさんも嬉しいよ」

「まだまだ鮎はいっぱいあるから、おなかいっぱい食べてちょうだいな」  
そう言っておばさんが運んで来るお代わりに歓声が上がります。

「「ありがとうございます」」

「あんにゅー」

アリア社長も大喜びだ。

「ほら、この鮎には二本の線が付いているだろう。これは神様に饗される鮎の印なんだ」

おじさんがお代わりの鮎を示す。初めて食べた鮎の美味しさに気付かなかつたが、確かに鮎には二本の傷が走っている。

「これは鵜飼いで漁った鮎にだけ付くんですよ」

と、おばさん。

「鵜飼い？」

「マンホームで大昔から行われていた、伝統的な漁法の事です。なんでも鳥を使つて魚を獲るのだとか。この春秋津嶋でイワレビコと呼ばれる女性の鳥使いさんたちが行っていると聞きました」

マンホームから来たばかりの望海も知らない事をスラスラと述べるアーニヤ。

「よく知ってるね、お嬢さん。ネオ・ヴェネツィアのウンディーネが、見習いのペア（両手袋）・シングル（片手袋）、一人前をプリマと呼ぶように、鷹匠や鵜飼いの鳥使い達は、見習いをワカタケヌ、一人前をイワレビコと言うんだよ。神様にお仕える伝統芸能で観光化されてないから、ウンディーネのようには知られていないがね。鵜飼いはお嬢さ

んたちのように舟を操るんだ」

おじさんの話におばさんが付け加える。

「柴舟つていう、ちようどお嬢さんたちのゴンドラと同じぐらいの舟よ」

「へえ。」

自分たちのように、お仕事で舟を操る女性がいることに興味を引かれるアイ。

「アイは魚偏に占うと書いてね、大昔この魚で占いをやったそうさ。その独特な香りに神秘的なものを感じたんだらうな。いまも神社に饗される鵜飼いの鮎は神事で使われる。——あ、お嬢さんたち、神社つて解るか？」

きよとんとするあずさやアーニヤに代わってアイが答える。

「日本の神様をお祀りしている神殿の事ですよ。灯里先輩から聞いたことがあります。」

「うん、そうなんだがちょっと違う。日本の神じゃなくて、このAQUAに居ます神様をお祀りしている所処なんだ。神殿のように大きなものもあれば、ネオ・ヴェネツィアの辻にあるような小さな祠だったり、建物が無いところもある。由来はマンホームの日本なんだろうが、そこに居る神様は、みんなAQUAの神様なんだ。マンホームからAQUAに来て、ここが好きになっちゃって住みついた神様も居れば、火星がAQUAになるなかで生まれた神様もいる」



ここAQUAでは神様も好きで移って来るんだ。

「なんだかAQUAに魅せられた自分や灯里先輩みたい。——神様が気に入って住みついちゃうって、なんだかとても親近感が湧く。」

「イワレビコは、獲った鮎の表情で吉祥を祈念するんだ。まあ神様との交感だな」

「お魚に表情なんかあるんですか？」

「まあイワレビコの話なんだが、精悍な顔付きもあれば恍けた顔の鮎もいるそうだよ。ある意味思い入れの強い人達だからなあ。だから神様から、いろんな経験もするそう  
だ」

「へえ、じゃあ灯里先輩が出会った不思議も、そんなAQUAの神様だったのかな。青秋津嶋じゃあないんですけれど、多島海の島にある、鳥居がいっぱいある神社で『狐の嫁入り』に遭ったって言ってました」

「狐の嫁入りとは珍しいもんに行くわしたものだなあ」

「きつと伏見神社のことですよ。あそこの神様は悪戯好きだから。その灯里さんてウンディーネさんは、よほどAQUAの神様に気に入られたんでしょうね」

おばさんの言葉にうんうんと頷くおじさん。

「お嬢さんの師匠さんは、ウンディーネより巫女さんの素質があるのかもしれないな」

「まあ、プリマ・ウンディーネさんにそんなこと言っちゃあ失礼ですよ  
おじさんの言葉にアーニヤとあずさが相槌を打つ。

「それはあるかもしれませんが。灯里先輩って思い入れが強いし、不思議遭遇率がやたら高いですし」

「藍華先輩の話だと、一緒にいると異次元空間に巻き込まれるって」

何とも酷い言われようだが、アイも否定しきれないところがつらい。

「お嬢さんの師匠もマンホーム出身だと聞いたが、神社に関係する家の出なのかい」

「名前は水無灯里って言うんですけど、聞いたことありません」

「水の惑星に気に入られたのに名前が『水無』とは面白いな。マンホームの日本のヒダつて土地に水無神社という古い社があるが、そこにゆかりのある人なのかな。もし灯里さんが鳥使いでも、きつといいイワレビコになっただろうよ」

「イワレビコは、舳先に篝火を焚いて夜に漁をするのよ。丁度雨も上がったし、今夜もやっているんじゃないかな。興味があつたら見に行つてらっしゃい」

いったいどんな人たちなんだろうと、楽しみな三人だった。

## S e r e n a t a 3 その篝火と集う妖精は

月明りのお陰で、夜道はそれほど暗くない。

川辺までの道筋。広がる田圃からカエルの合唱が聞こえる。

どんな水の妖精なんだろう。

アイはまだ見ぬゴンドリエを想った。イワレビコと呼ばれる舟乗りたち。小舟を操る職業は自分たちのような水先案内人（ウンディーネ）や渡し守（トラゲット）、郵便配達人ぐらいいし知らない。それもネオ・ヴェネツィアの中だけだ。

自分たち以外にも、ネオ・ヴェネツィアの外でも、ウンディーネのような水の妖精とよばれる人々がいる。

聞けば鵜飼いは、それこそ二千年以上も昔から行われていたらしい。それはゴンドラよりも、それこそマンホームのヴェネツィアよりも古い歴史。

「ユニペディアの検索では、地球時代の日本のギフトという地方で行われていた伝統漁法だとあります。なんと二十二世紀まで国家公務員だったそうですよ。鵜匠と呼ばれ、おもに男性の職業だったようです。女性が行うようになったのはAQUAにおいてから。その辺はウンディーネと一緒にですね」

モバイルを操りアーニヤが解説する。アーニヤもあずさも好奇心で一杯の様子。

アイはマンホームからやって来た日本人だが、そんな歴史は知らなかった。そして望海も。アイや望海はマンホームでなく異星（AQUA）で自分が知らない日本の事を聞いている。それは何だか不思議な気分。

雨上がりで大気中の塵が払われ、空気が澄み切っている。

くつきりとスカイラインを刻む紺色の山並み。月の光に青く浮かんだ千切れ雲。その雲の切れ間から、二つの月と、砂子を散りばめたような星空がのぞいている。

雲間から見える天の川に、四人は息をのんだ。

宇宙が、見える。

大昔のマンホームでは普通に見られたという風景だが、望海にとつては初めてだった。なにしろ月明りと星しか明かりが無いという夜に経験が無い。アイたち三人にとつても同じだった。建物がひしめく都会のネオ・ヴェネツィアではなかなか見られない星の密度だ。

師匠である灯里や藍華、アリスたちが、自分たちと同じ年頃だったときにグランマの家で見たという星空もきつとこんなだったのだろう。

がわがわと水の流れる音がしてきた。

葦の茂みを抜けると川に出る。

幅は一五〇メートルほどもあるうか。兩岸の河原も含めるともつと大きい。

ネオ・ヴェネツィアにも水の流れはあるが、この流れは速い。カナル・グランデはいわば内海の続きでたゆたゆとした動きだがこれはまるで溪流だ。水が平地を滝のようには流れている。

そんな流れの中に、火が幾つか見える。

ゴンドラよりも細身なシルエツト。舳先から川面に突き出た鉄籠で、薪を燃やしている。茜色の明かりに、黒い鳥影と舟に立つ女性の姿が浮かんでいる。舟は六艘ばかりか、おのおのに二名が乗り込んでいる。

ひとりか二人が櫂で舟を操りながら、時々櫂で船胴を叩いたり「ほーい」と聞こえる声を上げ、もう一人は舟縁に飛び上がって来る鳥の世話をしている様子。ちょうどプリマとシングルのような。それなら立っているのがイワレビコ、しゃがんだ方がワカタケヌか。

二人の服はそれぞれ違い、どちらもネオ・ヴェネツィアでは見たことのない衣装だ。灯里先輩から聞いた、神社の巫女さんという女性の姿に似ているが、もつと精悍な感じ。「イワレビコの服装は『狩衣』といい、ワカタケヌの方は『水干』といいます。どちらも中世の日本で使われていた装束ですね。巫女というより白拍子の姿に近いようです」とアーニヤがモバイル片手に説明。

「制服が違うんだ」

アイが呟く。水先案内業界は会社ごとに制服は違うが白を基調とした同じようなデザイン。会社の中ではプリマも半人前も同じ制服を身に着ける。呼び名も同じくウンディーネ。違いは手袋が有る無しだけだ。

「でも、漕ぎにくそう」

あずさの言う通り、どちらも袖が袋をぶら下げているように大きい。あれでは操船のときに邪魔にならないだろうか。

「そうでもありません。脇を見てみなさいな。両サイド丸開きです。それに袖口には紐が通っていて窄めることも出来る様ですよ。袴という穿きものも、いわばたつぷりしたキュロットのようなもので、いくらスリットが入っているとはいえ裾が長く細身なウンディーネの制服より動きの自由度は高そうです」

烏帽子と呼ばれる帽子を被るが、それも衣装と同様にイワレビコとワカタケヌは違った。イワレビコはすつくと立った立烏帽子、ワカタケヌのほうは折り畳んだような折烏帽子だ。ウンディーネが被るものより大きく、とくにイワレビコのものは大仰だが薄い材質で出来ているらしく光が透けて見える。見かけよりずっと軽いものなのだろう。

「あ、鳥が魚を捕まえてる」

魚をくわえた鳥が舟に戻って、ワカタケヌが鳥の首をつかみ揺するような仕草をする

と、もう幾匹かの魚を口から出している。それらを籠に入れる。ワカタケヌは左手に何本かの紐を束ねていて、それらの紐にも鳥が結わえられている。でも大方の鳥に紐はついていない。

「鵜という水鳥です」

アーニヤが望海に教える。鵜はネオ・ヴェネツィアにも普通に見かける。

鵜たちは獲った魚を戻すと、イワレビコの所作と声で再び川面へ漁に向かう。イワレビコは鵜が魚を獲りやすいように船を操り、櫂で篝火の方向を調節している。

時々篝火の籠を櫂で叩く。すると火の粉が立ち鵜たちが奮い立つ。

「紐が付いている鵜は、まだ見習いのようね」

あずさの言う通り、紐付きの方は動きもバタついていて漁に慣れていないと言った感じ。鳥が行こうとする方向を、ワカタケヌが引つ張ったり紐を緩めたりして調節している。戻って来る鵜にも対応しながらだ。

イワレビコもワカタケヌも、一度にいくつも事をこなさなければならぬ。

「鵜と人の呼吸が合わないと出来ない漁だね——」

「人馬一体というやつです」

「馬じゃないけど」

望海も呆然と見つめていた。漁の仕方よりも、川面に映える篝火の火、バチバチと火

の粉が舞い、キラキラと光る細波のなかで、動き回る黒い鳥たちと人の姿に心を奪われていた。そして波の音にまじって響く舟胴を叩く音と掛け声。

「何だか、夢の中みたい」

望海が呟く。

ウンディーネ三人は、イワレビコの所作に心を奪われていた。

美しい。

そう思った。

舟と鵜を同時に操りながら、動きに無駄が無い。それでいて女性を感じさせる優雅さが漂っている。精悍さと優しさが同居している感じ。

「あの立ち姿は、晃さんを思わせるわね」

「そして權捌きは、まるでアリシアさん——」

それは舞踊を舞っているようだった。

やがて、それぞれに漁をしていた鵜飼い舟が集まり出す。

お互いが行きつ戻りつしながら、円を描くように水面を走らせる。

篝火を円の中央に向けて、鮎を囲い込んでいるのだ。その統率された舟の動き。

この早瀬の中だ。

「すいん」



三人は息をのむ。自分たちもゴンドラを操船するからその凄さが解る。

かつて自分の師匠たちがシングルのときに練習していたように、ネオ・アドリア海の岬で合同練習をしたことがあった。潮の流れがあつて小島も多く操船が難しかったことを思い出す。まだ完全に沖まで出ていなかったにもかかわらず、あの複雑な水の流れだ。

夜目にも川には、浅瀬で細波立っているとところもあれば、深みで漕んでいるところがあることが解る。正確に水面の流れを読み、川底の様子を計っている。それもお互いの漁の動きを見ながらやっている。

「ほーい、おーい」

声を掛けあい、舟はまた陣形を変えていった。

円陣から両側に縦二列に並ぶ。

そして一人のイワレビコが詠い始める。

それを合図に、各艘があいだを徐々に窄めていく。

「恵みを寿ぎ奉る」

『よーおー』

一斉に舟胴を叩き篝火を揺らす。

狭まった水面に鵜たちが群がり、囲い込まれた鮎で水が湧きたっている。

イワレビコ、ワカタケヌ、鵜たちによる総掛りだ。それはまるで合戦。

合戦は唐突に終わると、鵜たちは自分の舟に戻っている。櫂を叩く音も掛け声も止み、静かな川面の上で、またイワレビコが詠いだした。

「恵みを寿ぎ奉る」

それに合わせてイワレビコ全員が斉唱する。

『鵜飼舟 あはれとぞ見る もののふの

八十字治川の 夕闇の空』

『八十字治川の 夕闇の空。』

澄んだ歌声が、朗々と夜のしじまに響き渡っていく。

「まるで、アテナさんのカンツオーネを聞いているようです・・・」

節回しも抑揚もまるで違うのに、それはカンツオーネ（歌）だった。

『あらたまの 年行きがえり

春されば 花のみにほふ

あしひきの 山下とよみ落ち激（たぎ）ち

流る僻田（さきた）の 河の瀬に

鮎子さ走る 島つ鳥

鵜飼伴なへ 篝（かがり）さし

なづさひ行けば 我妹子（わぎもこ）が

形見がてらと 紅の

八入（やしほ）に染めて おこせたる

衣の裾も 通りに濡れぬ』

『八十宇治川の 夕闇の空。』

最期に柏手を打ち、篝火が川面に落されて漁は終わった。

月明りだけのなかを鵜飼い舟は立ち去っていく。

何事も無かったかのように静けさが戻った川。ただ水の流れる音だけがしている。

「何だったんだろう・・・」

夢うつつな心持ちで望海が呟いた。

それはアイたちも同じだった。自分たちとは全く違う、こんなに凄い技量を持つウン

ディーネがネオ・ヴェネツィア以外にも居たなんて。

四人だけを残した川面に風が渡った。

すると、葦原から無数の光が飛び立った。

蛍。

見たことも無い蛍の群れが、河原と四人たちを包んで乱舞した。

「水の妖精——」

星のような蛍を見ながら、望海は眩くのだった。

# Notturno 蘇杭水鎮新地

蘇杭水鎮新地は、東西約三千キロに及ぶマリネリス峽海のほぼ中央、メラス湾のカンドル・オフィル入江にある。

ネオ・ヴェネツィア市同様、水没に瀕した中国の長江デルタ地域の古鎮（旧市街）を移して建設された。

かつて「上有天堂 下有蘇杭（天に極楽あれば、地に蘇州杭州あり）」と謳われた蘇州・杭州は、運河と水運、商業で栄えた街であったことから「東洋のヴェネツィア」と呼ばれたが、ここAQUAでも蘇杭市は「東方のネオ・ヴェネツィア」と呼ばれる。

縦横に運河が走り、無数の橋と路地があり、水と共に生きる古い町並みのあいだを小舟が行き交うそれは、ヴェネツィアを彷彿させる。ネオ・ヴェネツィアが運河に面した石造りのアパートメントとオレンジ色の屋根で華やかな印象を受けるのに対し、蘇杭は漆喰の壁と黒い瓦でしつとりと落ち着いた印象を与える。

それは、水の流れに、人を迎え入れる街と顧みる街。

夏の始まりに当たる十三月、マンホームでは新年にあたり蘇杭市は裏春節が来る。一月の正春節ほどではないが春節のお祝いが行われ、マンホームから東洋系の観光客が訪

れる。

新銭塘江と名付けられた、蘇杭市を横断する流れを行く三艘の舟。川面に柳並木の緑が美しい。葉影が波にそよいでいる。

「ねえ、アウンのそこはどう。忙しい？」

「ううんそれ程でも。愛紗ちゃんのところは大手だから大変なんじゃない」

「それが全然。茜華んちは暖鈴さんがいるから、予約凄いでしょ」

「まあまあかな、でもウチは零細だから。お客さんは暖鈴さんの弾詩が目的だし、板観光は閑古鳥かな」

板と呼ばれる吃水が浅い平底の小舟を操る三人の少女。ネオ・ヴェツィアのウンディーネにあたる、シレーヌと呼ばれる水先案内人たちだ。

年齢の頃なら15・6歳ぐらいか。彼女たちはまだ半人前だが、ウンディーネのシングルと違い、一人でお客を乗せて観光案内をすることが許されている。

「ツーリストは霧雨の古鎮よか大海嘯だもんね」

「霧期の蘇杭もいいと思うんだけど」

「夜霧にむせぶランタンと水路の揺らめき…」

「雨に濡れた緑と睡蓮の花」

「拙政園も訪れる人が少ないし、観光にはもってこいなのに」

櫂を漕ぐ純白のシレーヌの姿は、くすんだ風合いの古都の情景によく合い、水辺を流れる花片にたとえられる。

薄手のアオザイを基調とした制服は、運河を渡る風にたなびき、まさに花びらのよう。新銭塘江は、蘇杭市のカナル・グランデにあたる。兩岸に木造の商家と土蔵が軒を並べる。それはかつての海運の街、杭州の姿。蛇行しつつ蘇杭の街並みを分かち、そこから無数の運河が血管のように古い町並みを走る。それはかつての蘇州の風景。

蘇杭市がある地域は、夏の始まりはちようど雨期に当たり、霧と雨が多い。その雨期の大潮の頃は、流れ込む河川の増水と大潮の潮流によつて、細長いマリネリス峡海で大海嘯と呼ばれる海水の遡上現象が起こる。その規模、波高は百メートルに及び、幅二百キロのスケールで、水の壁が白波を立てながら三千キロを駆け上る。多くの観光客が訪れる水の惑星AQUAならではの一大ページェント。

「今年的大海嘯は凄かったもんね。何しろモーゼ堰を越えて水が溢れ出したんだもん」

「そう、お蔭で蘇杭も水浸し」

「東方のネオ・ヴェツィアが、あつちと同じアクア・アルタになちやつたんだから」

大海嘯の時期は、蘇杭のあるカンドル・オフィル入江は巨大なモーゼ堰で閉じられ、海水の遡上から守られる。なにしろ高さ百メートルに及ぶ津波だ。海拔ゼロメートルの

街はひとたまりもない。例年なら堰を立てるだけでOKだったものが、今年は例年になく大規模となり堰を越えて海水が流れ込み、蘇杭市は冠水となってしまった。マリネリス峡海の潮位がなかなか下がらずカンドル・オフィル入江の水位を下げるのに手間取り、蘇杭のアクア・アルタも長引いてしまった。

「水に沈んだ古鎮もいいもんだって、常連のお客さまはおっしゃって下さったけれど」

「正直、商売上がったりだったよね」

「板が通れる水路も限定されるし」

「大方の庭園が休館だったですものね」

「やっと水は引いたが、その余波は残っている。観光客の姿は少ない。」

「せっかくだから、これから三人で弾詩の練習しない？」

「そうね、観光案内の練習も兼ねて」

「なら、西湖はどうでしょう。ここからも近いですし」

「そう言うと、三人は舟を進めた。」

新銭塘江は川幅を拡げ、メラス湾の入口、カンドル・オフィル入江に出る。

「左手に見えてまいりましたビルは、外灘（バンド）と呼ばれるマンホームのかつての上海に在りました租界地の歴史建築群です。見ての通りヨーロッパ風の高層建築で、上海を代表した建物ですが植民地だったアジアを象徴する景色でもあります。現在は、蘇



抗国際宇宙港として、蘇杭市の表玄関となっております」

ネオ・ヴェツィアが島であるヴェネツィアそのものを移設したのと違い、蘇杭はその名が示す通り、幾つかの街が複合して造られた都市である。これも島という閉じられた街によるものと、陸地を背後に控えた膨張する街の違いだろう。AQUA移設にあたって、どうしても残したい風景と暮らしを省みて設計された、ある意味AQUAでもっとも都市計画な街といえよう。

舟は外灘の脇を流れる運河の一つに入る。

水辺に面して歴史的建築群が建ち並ぶ外灘の奥に、周囲にそぐわない朱色の建物が見えてくる。校倉のように木を組んだ逆台座のデザイン。

「右手に見えます赤い建物は、むかし上海で開催された万国博覧会の中国館です。これも歴史的建造物としてAQUAに移設されました」

「でも、ホントそぐわないよねー」

「周囲から完全に浮いてるっていうか。外灘でさえ『水鎮には合わない。ビルならマンホームのニューヨーク保存地区でじゅうぶんだ』ってお客さんもいますしね」

かつて上海で行われた万博のシンボルの建物だ。それ自体は歴史的な建造物なのだが余りに浮いた外形に評判は悪い。

「と、いう訳で、評判芳しくないこの建物は、移設当初から天后の社屋として使用され

ております」

これが、蘇杭市でシレーヌを他に先駆けて始めた天后の社屋だ。天后はネオ・ヴェツイアの姫屋に相当する。もともと上海で事業を展開していた呉安龍（アンドリユー・呉）がAQUAに移住して始めた会社で、操業もアーサー・C・グランチェスタの姫屋と同時期である。

旅行代理店や各種イベント業、ホテル・レストラン経営など観光業を手広く営む総合商社だが、水先案内の事業は意外と新しい。シレーヌ経営を始めたのは二二七〇年で五十年に満たない。それは蘇杭の水先案内は、ゴンドーリエのようにマンホーム時代から業種として確立しておらず、職業化されたのはネオ・ヴェツイアのウンディーネの影響によるものである。

「でも、茜華もアウンも、そこまで言わなくてもいいんじゃない。いちおう自分の会社でそれなりの愛着あるんだから」

そう愛紗はふくれる。

「赤にしても、うちのラール・キラは高得点です。特に夕日に映える姿がオレンジブラネットを彷彿させると」

「アレはずるいわよ、もともとマンホーム時代から夕映えで有名だったんだから。それにしても、アウンのどこってホント城好きよね。ネオ・ヴェツイアのもどつかのお城

だったんじゃない」

アウンの会社はアマデウス財団の橙屋公司、オレンジぷらねつと社の姉妹店だ。創業はオレンジぷらねつとの翌年。インドにあった『赤い城』と呼ばれた城砦を移築して社屋にしている。

「移築といつても一部ですが。全体を移転させたら街になつてしまいます。ゆくゆくはテラ・フォーミング後の金星に全移設の計画があるそうです。AQUAはそれまでの仮住まいだとか」

「えー、勿体ないよ。AQUAにとつても合っているのに」  
そう残念がる茜華。

「皆さんそう言います。もっとも百年先の話で、どうなるか判りませんが」

## N o t t u r n o 2 隴翠望樓、湖の霞に浮かぶ小亭で

水路は公園を経由して広い湖に出る。

蘇杭でも屈指の観光名所、西湖だ。周囲一五キロ、背後になだらかな山が控え、湖を分ける堤や小島が浮かび、湖の周辺には西湖十景と謳われた名所旧跡が多い。もともとはマンホームの杭州にあった景勝地である。

「右手に見えてまいりました石造りの橋は、西湖十景の一つ『断桥残雪』の断桥と白堤です。」

なだらかな曲線を持ち、石造りの中央に半円形の水路が空いている。橋には幾人かの観光客が、のんびりと西湖の風景を楽しみながら散歩している。

「白蛇伝の舞台にもなった場所で、雪が積もると南側だけ日に当たって雪が溶け、まるで橋が途切れているかのような光景になるためにこの名が付きました。ここ蘇杭は赤道に近いため本来なら雪は降らないのですが、火星の寒冷な気候を利用して年に数日間は雪が降ります。降雪日はネットで開示されておりますので、断桥残雪をご覧になりました方は、是非その時期に御再訪ください」

滑らかな調子で、櫂を漕ぎながら観光案内する愛紗。

「赤道直下なのに雪が降るってどうなのよ。それを思うとAQUAって本当に人工的な星なのよね」

茜華がぼんやりと感慨に耽る。

「気候制御ユニットが無ければ、火星は平均気温マイナス四三°Cですよ。雪ぐらい降るのが本来。でも手動だから降雪量までは調節できないのよね。いきなりのドカ雪だったり」

茜華の呟きにアウンが返す。

「去年は断橋残雪どころか雪かきだったもんね」

「それらをひつくるめてAQUAって訳よ、先人達の努力に感謝」

グツとこぶしを握って愛紗がポーズをとる。

「何、その強引なまとめかた」

舟は白堤沿いに平湖秋月のお月見スポットを回り、西湖の南岸まで続く長い堤防「蘇堤」へと進む。蘇堤は詩人として有名な蘇東坡が築いたといわれ、春には蘇堤春曉と讃えられる柳や桜が美しいところだ。いまは風にそよぐ木々の緑が美しい。

やがて三艘は堤の内側にある外湖のひとつ岳湖に入り、水草が茂った一角に差し掛かった。曲院風荷と呼ばれる蓮池だ。

この時期、一面に色とりどりの蓮の花が咲き、甘い香りが漂っている。その数百種類以上。

蓮池に小亭が建っている。

浮島のような亭に船を寄せて三人は降りた。まさに蓮の中に立っているようだ。彼女達には舟の上で楽器を奏することは許されていない。

「ねえ、弾詩の練習にはもってこいの場所でしょ」

普段なら観光客の姿がある場所だが、大海嘯に持つて行かれて人の姿はない。それに昨夜までの雨に洗われて、蓮の花が生き生きしている。

「閑古鳥もいいものですね」

「これだけの華が、全部私たちの雅樂(うた)を聞くために咲いてくれるみたい……」  
「こら茜華、その恥ずかしいセリフは何」

『恥ずかしいセリフ禁止』は、ネオ・ヴェツィアだけではないうようだ。

三人は小亭のベンチに腰掛けて、それぞれ楽器を構えた。

愛紗は古琴。

アウンはダンバウという一弦琴。

茜華は二胡だ。

三者で構える楽器は異なるが、共通するのは膝上に置くタイプで音程を決めるフレツ

ト（柱）がない。ダンバウは台に置いて演奏するのが普通だが、アウンのものは胴を脚で挟めるようになってゐる。

フレットが無いという事は、音程を取るのには難しいがグリッサンドが自由だという事。つまり唱うように演奏できる。

弾詩は、もとは弾詞と呼ばれ演者が楽器に合わせて物語を講ずる蘇州の芸能だった。弾詞の歴史は古くマルコポーロの時代にまで遡る。琵琶や三弦を用い、二〜三人で演じられていたものを、ひとり船上で楽器を演奏しながら詩や散文を詠ずる形式に、ここAQUAで昇華された。言葉を伴わず、音楽だけで詩や散文を表現する場合もあり、高い技量と古典への深い知識が必要とされる。AQUA生まれの古典芸術で演者も弾詩と呼ばれ、シレーヌたちの到達点でもある。

一五歳の彼女らにそんな技量も造詣も無い。そこで、まずは楽器の練習という訳だ。まずアウンの一弦琴の独白から始まる。

呟くように調べが流れる。

そこに愛紗の古琴が加わり、独唱を下支えする。

二人の掛け合いの上に、茜華の二胡が詠いだす。

曲は朧翠望楼、雨煙に霞む西湖を謳ったものだ。それぞれが全く違う旋律を奏でながら、呼吸を合わせて一つの調べを形作っている。それはオペラで三様の朗唱が混ざり合

い、調和し、詠唱となつていくのに似ている。

アウンが湖畔の水気を詠い、

愛紗が亭や水面に落ちる水滴を、

茜華が霞む眺望を謡う。

その上に、蓮の甘い香りが被さつていく。

その、咽せ返るような空気。

「ああつ、もうダメー！」

愛紗が叫んで演奏を中断した。

「これ以上は酔っちゃう」

本当に酒に酔つたような赤い顔。

「そうですね、これ以上はギブです」

「私も」

手を止めたアウンも茜華も、すっかりのぼせた顔をしていた。

蒸した雨期明け前の気候と、蓮の香りに当てられたのだ。それと朧翠望楼の曲想が重なつた。

「それにしても、弾詩はひとりで演奏するものでしょう？　なんで暖鈴さんは合奏での練習を勧めるんだらう」



「私のところのアムリタさんもそうです」

「うちのアニタ師傅も、彈詩修業はまず合奏からって言ってるわ」

暖鈴もアムリタもアニタも、蘇杭を代表する彈詩シレーヌだ。それぞれ茜華、アウン、愛紗の師匠（師傅）でもある。

「次に続く言葉が、古典を学ぶには呼吸が大事って」

「そりゃ、彈詩に古典の造詣が必須なのはわかるけど、古典と呼吸ってねえ??」

「どちらにしても、古典は大難問です。」

「むんぎゃあー、古典って聞いただけで、漢字の大軍が頭ん中に攻めて来るわー」

と、愛紗は頭を掻きむしる。現代っ子の三人にとって故事や漢詩は超古代文明に近い。

そのとき、ざあと湖面を薙ぎ、風が三人の頬を撫でた。

火照った顔が醒まさされ心地よい。

ふと見上げた空に、雲が割れ、日差しが差し込む。

「あ、空開けた」

茜華が言う。

日差しはみるみる西湖に広がり、湖面がキラキラと輝き始める。

雨期明けの日照りが熱い。

蘇杭の、暑い盛夏の始まりだ。